批評と紹介

ザヒール・アッディーン・
ニーシャープーリー著（A. H. モートン校訂）
セルジューク朝史

大塚　修

本書の校訂者 A.H.モートンは、アルダビール文書やラシード・アッディーンの書簡集などを対象に、主にサファヴィー朝期やイル・ハーン朝期を中心に、ペルシア語歴史文献に関する論文を多数著している。本書は、彼が蓄積された膨大な文献学的知識をもとに、従来散逸したとされていた、セルジューク朝期に著された王朝史『セルジューク朝史 *Saljūq-Nāma*』を復元した「新たな」校訂本である。

同時代史料に乏しいセルジューク朝史研究において、従来研究者達が注目してきたのは、著者不明『王書 *Malik-Nāma*』（アルプ・アルスラーン（在位1063－72）への献呈書）とニーシャープーリー著『セルジューク朝史』（トゥグリル3世（在位1176－94）への献呈書）の2史書であった。両史書とも、後世の史書にしばしば引用されたため、現在でもその存在は広く知られているが、その写本自体は確認されていない。前者については、Cl.カーエンによる専論があり(1)、その性格や内容に関して、研究者間で合意が得られている。しかし後者については、20世紀初頭のM.イクバール(2)以来様々な研究者達が分析を試みてきたが、いずれも定説となるには至らなかった。本書刊行の意義を明確にするためにも、本書の内容に踏み込む前に、まず『セルジューク朝史』をめぐる論争を簡潔に紹介したい。

イクバールは、『セルジューク朝史』の内容を引用した史書として、ラーワンディー著『胸臆の安息 *Rāḥat al-Ṣudūr*』の校訂を行い、同書の価値を説明した。これに対してI. アフシャールは、カーシャーニー著『歴史精髄 *Zubdat al-Tawārikh*』に収められた「セルジューク朝史」が、『セルジューク朝史』祖本からの引用であるとし、これを底本に次の刊本を出版した。

Saljūq-Nāma, ed. I. Afshār, Tehran, 1332Kh.

本書は14世紀の史書からの復元であり、その校訂作業も厳密に行われた形跡がないため、多くの問題点が指摘された。そこで、より祖本の叙述に近い史書として、A.アテシュは次の刊本を出版した。

Cāmi' al-Tavāriḫ, ed. A. Ateş, Ankara, 1960.

本刊本の底本は、1310年代に書写された2種類のラシード・アッディーン著『集史 *Jāmi' al-Tawārikh*』第2巻「世界史」所収の「セルジューク朝史」の写本であり、その書写年代は（1）より古く、校訂も厳密に行われている。さらに、本書の叙述を『セルジューク朝史』祖本にきわめて近いと考えたルーサーは、次の英語訳を残した。

The History of the Seljuq Turks from the Jāmi' al-Tawārikh: An Il-khanid Adaption of the Saljūq-Nāma of Ẓahīr al-Dīn Nīshāpūri, tr. K. A. Luther & ed. C.E. Bosworth, Richmond, 2001.

以上のように、この約100年間の間に『セルジューク朝史』祖本を復元しようとする作業は様々な形で行われてきた。しかし、これらのどの説を採用するかに関しては、各研究者の見解は様々であった。

本書は、これら『セルジューク朝史』をめぐる諸説に1つの解答を与えるであろう研究書兼校訂テキストである。モートンは、自らが再発見し、底本とした写本を『セルジューク朝史』祖本からの書写と断定した上で、その写本と、『セルジューク朝史』祖本から分岐した後世の諸史書との系統関係を網羅的に再検証し、その成果を踏まえて、より祖本に近い形の『セルジューク朝史』を校訂したのである。

以下、本書の構成・内容を紹介した後、本書刊行の意義について論じたい。本書は63頁の史書解題と136頁の校訂テキストから構成されている。

① 史書解題

まずモートンは、王立アジア協会（ロンドン）蔵の1写本の再発見の経緯を説明する。同協会がセルジューク朝史を叙述した写本を所蔵していることは、既にバルトリドが指摘し、その調査を試みている。しかしその際、彼は肝心の写本を発見できず、調査を断念した(3)。その後長い間、件の写本は紛失したと考えられてきた。これに対してモートンは、この写本がバルアミー著『タバリー史翻訳 *Tarjuma-yi Tārikh-i Ṭabarī*』（同協会 Persian No. 22）と題される写本と合冊になっている事実(4)に気付き、調査を行い、件の写本を確認したのである。写本の形態は、12葉（1葉欠落）・35行・32.4×23.5cm・ナスターリーク体である。また、トゥグリル3世への献辞及び彼に対して「神ガ彼ノ支配ヲ永続サセンコトヲ khallada allāhu mulka-hu」という祈願文が付与されていることなどから、モートンはこの写本がトゥグリル3世の治世に執筆された写本の書写（15世紀半ば～16世紀初頭書写）であることを確信している。

しかし彼の作業は、本写本の再発見に留まらなかった。彼の作業の最大の

特徴は、『セルジューク朝史』祖本からの書写と考えられる本写本を、そのまま刊行するのではなく、後世の関係する諸史書と比較対照し、より祖本に近い形での復元を試みた点にある。彼が分析したのは、次の8史書である(略号は本書の記号を採用)。

M：Nīshāpūrī, *Saljūq-Nāma*（モートンが再発見した写本）

P：Rāwandī, *Tārīkh-i Saljūqiyān*, 国立図書館（パリ）Suppl. Persan 1556, ff. 231b-261a.

R：Rāwandī, *Rāḥat al-Ṣudūr wa Āyat al-Surūr*（前述したイクバールによる校訂本）

Y：Yazdī, *Al-'Urāḍa fi Ḥikāyat al-Saljūqiya*, ed. K. Süssheim, Leyden, 1909.

A：Kāshānī, *Zubdat al-Tawārīkh*（前述したアフシャールによる校訂本）

J：Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīkh*（前述したアテシュによる校訂本）

S：Shabānkāra-yī, *Majma' al-Ansāb*, ed. M.H. Muḥaddith, Tehran, 1363Kh.

K：Khabīṣī, *Saljūqiyān wa Ghuzzān dar Kirmān*, ed. M.I. Bāstānī-Pārīzī, Tehran, 1373Kh.

彼はこれらの各史書に関して、『セルジューク朝史』祖本との関係を中心に解題を附し、新しい文献学的見解を披露する。これら諸史書の一部に関しては、最近の研究においても約100年前のイクバールの説が引用される事例も散見され、研究者達の間で、文献学的知識が共有されているとは言い難い状況にあった。それ故に、本史書解題は最新の研究成果を諸研究者と共有するという意味で重要な成果と言える。ここで、モートンが唱える見解の中で、評者が重要だと判断したものを紹介したい(5)。

P：従来パリ写本のみが分析対象となってきたが、同内容と考えられるイランとインドに所蔵される別の2写本の存在をも指摘している。さらに、本史書の著者をRの著者ラーワンディーに同定し、Rの縮約と考えられてきた本史書を逆にRの情報源に位置付ける。

R：従来『セルジューク朝史』祖本に依拠して執筆されたとされてきたが、祖本から最初に分岐したPの祖本と2番目に分岐した写本に依拠して、Rの祖本が作成されたとする。

Y：従来Rの縮約と考えられてきたが、Pと同系統である箇所を数多く指摘し、Mに近い箇所についても言及している。執筆年代に関しても、J.オバンの説(6)を採用し、従来のイル・ハーン朝君主アブー・サイード（在位1316−35）の治世からウールジャーイトゥー（在位1304−16）の治世に訂正し、本史書をラシード・アッディーンへの献呈書とする。

A：従来Jからの引用と考えられてきたが、逆に本史書がJに先行するとした。その上で著者カーシャーニーを、『集史』第2巻「世界史」執筆の中心的貢献者と位置付け、逆にラシード・アッディーンが彼の著書を流用したとする。

J：『セルジューク朝史』祖本の記述が、Aを経由して書き替えられたとする。本史書にはAと共通する、イル・ハーン朝期の歴史認識により生じた増補箇所が多数見られるとし、その中には一部Jにしか見られない増補箇所もあるという。

S・K：従来『セルジューク朝史』祖本との関係は指摘されてこなかったが、一部、校訂の際に利用している。

次に、これら8史書を用いて行われた校訂作業に関して紹介したい。モートンは自ら再発見したMを、唯一の『セルジューク朝史』祖本からの書写と断言しながらも、祖本からの異同が数多くあるとする。校訂作業は、前述の8史書の中でも特に5史書を中心に行われた。その過程で、彼は諸写本の系統関係図を、現存していない写本も想定しつつ、詳細に再現している（42頁・図1）。それによれば、きわめて早い時期に祖本は2系統に分岐する。この最初に分岐した写本からはMとPが、2番目に分岐した写本からはAとJが成立する。そして両者の中間に位置する系統をRとする。彼はその結果を踏まえ、記述の系統が近いPとR、AとJを、2つのグループに分類し、Mとの記述の異同を確認する。彼は、AやJにあるが他の3史書にはない記述、PやRにあるが他の3史書にはない記述は採用していない。また、祖本からの書写と考えるMにあるが他の4史書にはない記述も採用していない。さらに2箇所ほど、これら5史書にある記述を採用せず、修正を施している。

続けてモートンは、『セルジューク朝史』の著者や性格に関する分析を行い、その史料的性格を新しく提示する。これに関しては、数年前にメイサミ（註5参照）が詳細な解説を試みていたが、その一部を否定している。例えば、著者ニーシャープーリーは王子アルスラーン（在位1161－76）の教育のために、マスウード（在位1134－52）に雇われたという説は、モートンによる新しい仮説である。また本史書における年代や人名の誤表記の多さを、ただ著者が記憶していることを叙述し、それ以前の史書を逐次引用したわけではないためとする。そのため、著者と同時代の記述は、正確さが増すと解説する。そして著者は、諸君主の血統・性質・振舞・慣習・習慣を叙述し、読者に過去のセルジューク朝の諸君主やトゥグリル3世のために祈りを捧げることを望んだと考えている。最後には、ほとんどの主要なアラビア語諸史書より年代が古いこと、ほとんどの後世のペルシア語諸史書の情報源となったことから、本史書を最も重要なセルジューク朝史に関するペルシア語史書と

結論付けている。

②校訂テキスト

次に校訂テキストに関して紹介したい。前述したように本テキストの校訂作業は、M写本を底本として、他の7つの写本・校訂本と対照する形で行われた。テキスト下部には、各史書間の異同が示されており、校訂の経緯を容易に把握できる。実際、本テキストに目を通してみると、従来『セルジューク朝史』祖本の内容に最も近いと考えられてきたJとの異同が明白となる。ここでは、『セルジューク朝史』の「新刊本」としての本テキストの価値を考察するため、本テキストとJを対照し、その異同を概観したい(7)。

本テキストとJを対照してみると、単語の補足・置換から、文章の削除・追加まで大小様々な異同が確認される。勿論逆の場合もあるが、概してJの方が、その記述が冗長になる傾向にある。例を挙げてみると、Jでは5人とされるセルジュークの息子（251頁）が、本テキストでは4人と記される（5頁）。さらに、Jの冒頭にあるセルジューク家のオグズ部族のキニク氏族に連なる系譜（251頁）は、本テキストには存在しない。このように両テキストには、冒頭のセルジューク朝の家系に関する記述に限っても、重大な異同が存在する。単語面でも、khayl-i ū（7頁）が、Jの中では nawkarān-i ū と置換される（255頁）事例などが見られる。つまりJは、『セルジューク朝史』祖本に近いとはいっても、後世の歴史認識の下で書き改められた別の史書と考えられるのである。このことは、特にルーム・セルジューク朝に関する記述について言える。本テキストには同王朝に関する記述はほとんど存在しないが、Jには、同王朝の祖クタルミシュが、アルプ・アルスラーンに対抗して王位を争った説話（273－274頁）をはじめとし、数々の同王朝の事跡が挿入されている。これらは『セルジューク朝史』祖本の記述としてではなく、『集史』の記述として考慮しなければならない。同様の事例は、アフシャールにより『セルジューク朝史』として校訂されたAについても言える。

以上の概略を踏まえ、本書の意義の評価に移る。モートンの最大の功績は、多くのヴァリアントが残されている『セルジューク朝史』を執筆された時期の状態に復元しようとした点にある。彼は、『セルジューク朝史』祖本に最も近いと想定されるMでさえも、15世紀以降の書写であるため、祖本から異同があると考え、校訂作業に取り組んだ。このため、より『セルジューク朝史』祖本に近いテキストが復元され、12世紀末に叙述された史書として本テキストの利用が可能となった。また本書の意義は、セルジューク朝史研究の分野に限定されるものではない。従来散逸した史書を校訂する際には、その

テキストを後世に著された別の史書の記述から復元するという手法が、一般的に用いられてきた。勿論それらは重要な作業かつ成果と言えるが、後世の史書には、その時代の歴史認識に応じた形で記述が挿入され、書き替えられている可能性が十二分に想定される。そのような可能性を含む散逸した史書の復元方法に関しても、本書の寄与する所は大きい。

このように本書の刊行には大きな意義が認められるが、まったく問題がないわけではない。まず目に付くのは、誤植の多さである。史書解題では、単語の重複が数箇所見られる（例えば7頁註2の as の重複）。そして最も読者にとって残念なのは、35頁の註が、註3の途中で切れ、註4の内容が不明になっている点であろう。校訂テキストでも、明らかに anbiyā（預言者達）となるべき単語の、バーとヤーの点の位置が逆になっている事例（1頁）や ma'zūl（解任）となるべき単語の、アインがガインになっている事例（82頁）などが見られる。このような校正上のミスに関しては、再版の際に訂正されることを望む。

史書解題の内容に関しても、幾つか論理の飛躍が見受けられる。特にPの著者をラーワンディーとする説は、疑問である。実際ラーワンディーはRの中で直接ニーシャープーリーの著書に言及する一方、Pと思われる史書に関しては何ら言及していない。さらに同時期には、技巧的な文体の史書を後世の史家が簡潔に書き替える事例が複数見られ、また類書も多いため(8)、記述の類似や状況証拠のみを根拠に、同一の著者と断定するのは早計であろう。この点に関して、現在の史料状況からは、PとRの強い関係を指摘する以上のことはできないと考える。

校訂作業に関しても、幾つかの疑問が残る。モートンは、各史書の系統関係を詳細に分析し、諸写本の執筆年代にも言及しているが、彼が校訂の際に用いたのは、ほとんどが校訂本である（8史書のうち6史書（R、Y、A、J、S、K））。さらに写本を用いたPに関しても、他の2写本の存在を指摘しながら、それらを利用していない。Mの校訂にあたり、同一史書の写本間の異同を想定するならば、他の史書に関しても写本間の異同を分析する必要がある。特にPは15世紀の書写であり、より厳密に作業するならば、13世紀後半に書写されたというイランに所蔵される別の写本も利用するべきであっただろう。また校訂本に関しても、少なくとも註に写本間のヴァリアントが明示されていないAやSの古写本程度は確認する必要があっただろう。さらに、彼が校訂に際して前述の8史書を選んだ基準も不明瞭である。彼自身指摘するように、『セルジューク朝史』を利用した史書は、他にも存在する（ハムド・アッラー・ムスタウフィー著『選史 *Tārikh-i Guzida*』とハーフィズィ・アブルー著『全史 *Majma' al-Tawārikh*』）。ちなみにRを校訂した

イクバールも、この両書を分析の対象としている。従来の研究を総括し、新見解を提示するという意味では、この両書も分析対象とする必要があったと考える。

いずれにしても、ペルシア語で著されたセルジューク朝史叙述のほとんどに、『セルジューク朝史』からの直接的・間接的引用が見られるため、状況はきわめて複雑であり、本書によりその系統関係が完全に解明されたわけではない。またそれは不可能であろう。しかし本書は、諸説あった『セルジューク朝史』の位置付けに、1つの回答を示し、セルジューク朝史研究に「新たな」史書をもたらしたと言える。我々後進はこの上にさらに文献学的成果を蓄積し、モートンの作業の精度をより一層高めていかなければならない。

註

(1) Cl. Cahen, "Le Malik-Nameh et l'histoire des origines Seljukides," *Oriens*, 2-1, 1949, pp. 31-65.

(2) 管見の限り、『セルジューク朝史』からの書写と想定される各史書の記述の位置付けを、最初に体系的に分析したのは、イクバールである。Rāwandī, *Rāḥat al-Ṣudūr wa Āyat al-Surūr*, ed. M. Iqbāl, London, 1921, pp. XXIX-XXXVII.

(3) W. Barthold, *Turkestan down to the Mongol Invasion*, 3rd ed., New Delhi, 1992 (1900), p. 30.

(4) Bal'amī, *Tārīkh-Nāma-yi Ṭabarī*, ed. M. Rawshan, Tehran, 2001, vol. 1, pp. 49-50を参照。モートンが使用したのは、1995年出版の刊本。

(5) セルジューク朝期までのペルシア語諸史書の性質に関しては、次の研究が詳しい。J.S. Meisami, *Persian Historiography*, Edinburgh, 1999.

(6) J. Aubin, "Le patronage culturel en Iran sous les Ilkhans: une grande famille de Yazd," *Le monde iranien et l'Islam*, 3, 1975, pp. 107-18を参照。

(7) 本稿ではJのテキストとして、Raşīd al-Dīn, *Cāmi' al-Tavārīḫ*, ed. A. Ateş, Ankara, 1960; offset rep. Tehran, 1362Kh を用いた。

(8) 例えばセルジューク朝史関係史書では、'Imād al-Dīn al-Iṣfahānī, *Nuṣrat al-Fatra* を縮約した Bundārī, *Zubdat al-Nuṣra* が挙げられる。Ẓahīr al-Dīn Nīshāpūrī, *The Saljūqnāma of Ẓahīr al-Dīn Nīshāpūrī: A Critical Text Making Use of the Unique Manuscript in the Library of the Royal Asiatic Society*, ed. A.H. Morton, E.J.W. Gibb Memorial Trust, 2004, 63+132頁.